

症 例

同時性食道胃早期重複癌の1例

平鹿総合病院外科

武田 裕 小関 和士 平川 久
松本 宏 松岡 富男 菅谷 彪

A CASE OF CONCOMITANT ASSOCIATION OF
EARLY ESOPHAGEAL CARCINOMA AND EARLY GASTRIC CARCINOMA

Yutaka TAKEDA, Kazushi KOSEKI, Hisashi HIRAKAWA,
Hiroshi MATSUMOTO, Tomio MATSUOKA and Takeshi SUGAYA

Department of Surgery, Hiraka General Hospital

索引用語：早期食道癌，早期胃癌，食道胃重複癌

はじめに

診断技術の進歩に伴ない，近年，早期胃癌のみならず早期食道癌の報告例も増加してきてはいるが，両者の同時性合併症例は少なく，われわれが収集しえた本邦報告例は8例にすぎない。最近われわれは，本邦9例目と思われる同時性食道胃早期重複癌の1例を経験したので若干の検討を加えて報告する。

症 例

症例：66歳，男性。

主訴：約2ヵ月間にわたる嚥下困難，嘔吐。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：20歳時に胸膜炎および急性虫垂炎。

現病歴：昭和57年5月ごろより嚥下困難，嘔吐があり近医受診，食道胃透視にて食道癌が疑われ当院に紹介入院となる。

入院時血液生化学検査：肺機能検査などに特記すべき異常を認めなかった。

食道胃透視所見：胸部中部食道に6.5×2.5cm境界明瞭なポリープ様病変，胃噴門直下小弯側に軽度の壁不整を認めた（図1，2）。

内視鏡所見：門歯列より30cmに内腔を埋める易出血性の隆起性病変を認め，肛門側への内視鏡挿入は不能であった。生検にて食道病変より扁平上皮癌の診断を得たが，胃病変の確認はできなかった（図3）。

手術：昭和57年7月28日右開胸開腹により胸腹部食

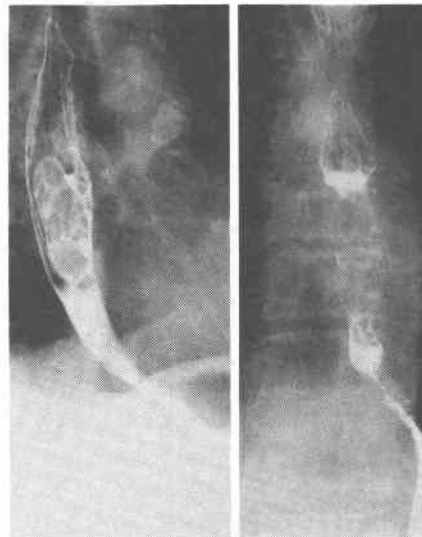
道切除，胃噴門側切除を行い細い胃管を形成し，後縦隔還納法による頸部食道胃吻合にて再建した。

手術所見：食道・Im, Ao, PLo, Mo, N (-)¹⁾，胃・C, Min, Ho, Po, So, N (-)²⁾。

標本肉眼所見：胸部中部食道に0.5×0.8cmの細い茎を有する5.5×2.5×2.5cmのポリープ癌及び，胃噴門部小弯に皺襞集中を伴なう2×1cmのIIc様病変を認めた（図4）。

病理組織所見：食道・中分化型扁平上皮癌 sm, ie (+), ly (+), v (-). no.

図1 食道透視写真
胸部中部食道にポリープ様病変

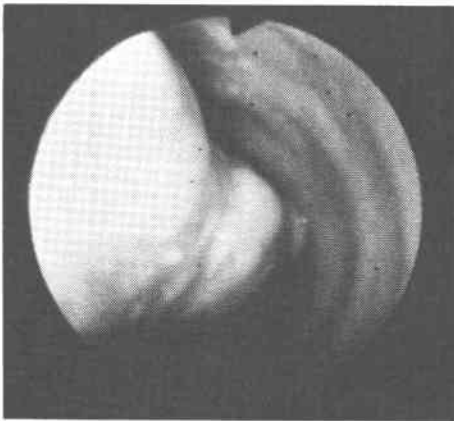


<1985年6月19日受理>別刷請求先：武田 裕
〒980 仙台市星陵町1-1 東北大学医学部第2外科

図2 胃透視写真
胃噴門直下小弯側に軽度の壁不整



図3 食道内視鏡写真
門歯列より30cmに内腔を埋める巨大な隆起性病変



胃・高分化型腺癌：sm, ly₁, v₁, n₀, ow (-), aw (-).

以上により同時性食道胃早期重複癌と診断された(図5, 6).

術後経過：術後一過性の肝機能障害を認めた以外順調に経過し、第12病日より経口摂取を開始した。術後合併療法として頸部上縦隔にT字型予防照射6,000 rad 施行の後退院した。術後9カ月目の昭和58年4月25日、再建胃管に生じた出血性潰瘍により再入院。エタノール局注などにより止血をみ、潰瘍は軽快したが、

図4 切除標本
胸部中部食道に細い茎を有するポリープ癌および胃噴門部小弯にIIc様病変

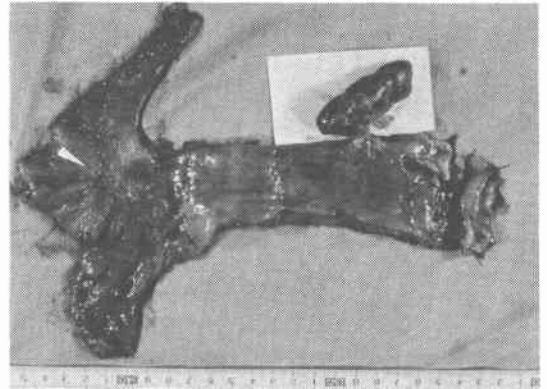


図5 食道組織標本
中分化型扁平上皮癌

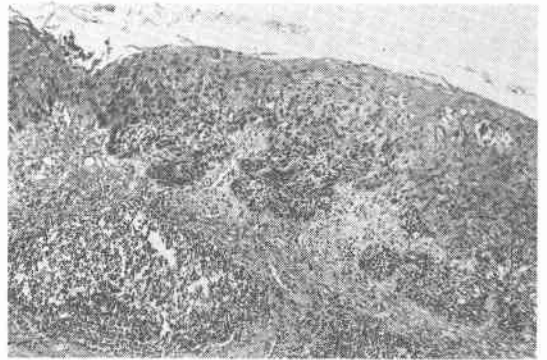
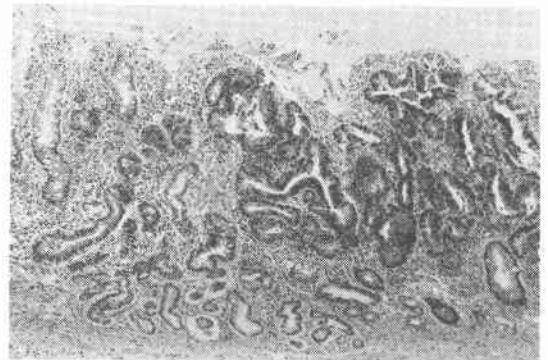


図6 胃組織標本
高分化型腺癌



嚥下性肺炎を併発し呼吸不全に陥り昭和58年10年3日死亡した。病理解剖にて癌再発のきざしおよび radiation pneumonitis の所見は認められなかった。

考 察

原発性重複癌とは、おのおの腫瘍は離れて存在し、お互いの間に従属性がないとする Warren & Gates³⁾の定義が現在主に使用され、多彩な症例が報告されるようになってきている。日本病理剖検輯報⁴⁾⁵⁾によれば、総剖検数に対する重複悪性腫瘍例の割合が、昭和46年から昭和56年までの10年間で、1.54%から3.71%と2倍以上の増加を示している。近年の悪性腫瘍に対する診断、治療の進歩により、食道癌と胃癌の重複症例も増加しており、1907年林⁶⁾に本邦初例が報告されて以来、1980年阿保⁷⁾の全国集計では同時性、異時性を合わせ、248例を数えるに至っている。同時性食道胃重複癌に限れば、頻度に関しては、Goodner⁸⁾の食道癌1,315例中4例(0.3%)、中山⁹⁾の1,506例中6例(0.4%)、五十嵐¹⁰⁾の1,375例中25例(1.8%)、芦沢¹¹⁾の826例中9例(1.1%)という報告がある。阿保⁷⁾の全国集計では、食道癌11,732例中同時性食道胃重複癌は186例(1.6%)で、その186例中早期胃癌が36例であり、さらにその中で食道も早期癌であったのは6例にすぎない。同時性食道胃早期重複癌は、大橋¹²⁾の報告以来本症例を含め、本邦では9例にすぎず極めてまれなものである(表1)^{12)~17)}。自験例を含めて検討すると、男女比が8:1、年齢は43~72歳、平均57歳である。

主訴は狭窄感あるいは心窩部不快感などであるが、症状が全くなく検診にて発見された症例も9例中2例あった¹⁰⁾¹⁶⁾。

癌占居部位に関しては、食道では胸部中部食道が9

例中6例と多くを占め、胃では上部、下部ともに4例、中部1例であった。

深達度に関しては、食道ではm3例、sm6例、胃ではm6例、sm3例であった。

予後に関しては術死を除く3例が2年末満で死亡しており、早期食道癌切除例の累積5年生存率¹⁸⁾が79.3%であることを考えると決して良好とは言えない。他施設の報告例では死因が明らかにされていないため検討を加えるのは困難であるが、本邦の早期食道癌177例の集計¹⁸⁾でも再発が確認された例が9.6%あり、その中の59%は頸部あるいは上縦隔リンパ節への再発である。食道癌と胃癌の合併例では、その手術侵襲が過大となることを危惧し、とくに胸腔内リンパ節郭清がやや消極的になってしまうことも考えられ、いわゆる表在癌が早期癌として取り扱われ、結果的に生存率の低下をひきおこす可能性も否定できないところである。また合併療法の面でも、種々の制約を受けることも十分に考えられる。

阿保⁷⁾による全国集計では、食道の同時性重複癌症例の中で、重複癌臓器としては胃が76.5%と高頻度を占め、食道癌と胃癌との合併は特に注意を払わなければならない問題である。同時性合併例で早期胃癌が19%⁷⁾と高頻度で見られ、また国立がんセンター・食道疾患研究会¹⁹⁾の集計では食道の再建臓器として胃が83.6%もの高率で用いられているという現状を考えると、胃病変の検索は特に慎重に進められなければならない。本邦の同時性食道胃早期重複癌症例9例の中ではほとんどが、食道と胃に関して生検による確定診断がなされていたが、中には内視鏡挿入時の反射が強かったり¹⁴⁾また本症例の様に食道の病巣が巨大かつ易出血性のために内視鏡挿入が不能で、術前の胃の検索が不十分にならざるをえなかった症例もある。この様な症例に対しては、芦沢¹¹⁾が述べているように、術中胃の視診、触診を十分に行ない、必要に応じて胃切開術、術中迅速診断などを活用し胃病変の見逃しを防ぎ、適切な術式の選択を行わなければならないことは論をまたない。治療については診断確定の意味からも十分な郭清が望まれ、また適切な合併療法の選択も必要であろう。更に、本症例は癌再発は認められなかったにもかかわらず、術後9カ月目におこった挙上胃管からの出血を契機とし誤嚥、嚥下性肺炎という経過で不幸な転機をとったものであり、長期的な患者管理の重要性を改めて認識すべきだと考えられた。

表1 同時性食道胃早期重複癌症例
早期食道癌と早期胃癌の重複癌症例

症 例	癌占居部位	病理組織型(深達度)		予 後 (手術年度)	発表施設
		食 道	胃		
1 ♂ 53	Ea C	sm mod.diff.sq.c.c.	ll.c.m tub.ad.c.	3年10ヵ月(生) (1973年)	廣研付農病院外科
2 ♂ 58	lm C	sm well.diff.sq.c.c.	ll.c.m tub.mucon.ad.c.	1年10ヵ月(死) (1975年)	東京女子医科大学 消化器科センター
3 ♂ 58	lm A	sm mod.diff.sq.c.c.	ll.c.sm medull.ad.c.	12ヵ月(死) (1976年)	〃
4 ♂ 72	Ei C	sm mod.diff.sq.c.c.	l.sm papill.ad.c.	6日(死) (1977年)	鳥取大学第一外科
5 ♀ 64	Ea A	mm mod.diff.sq.c.c.	ll.c.m tub.ad.c.	3ヵ月(生) (1977年)	埼玉国立がんセン ター腹部外科
6 ♂ 60	lu,lm A	m well.diff.sq.c.c.	m signet ring.c.c sm malig. lymphoma	9ヵ月(生) (1979年)	国立がんセンター
7 ♂ 43	lm A	sm mod.diff.sq.c.c.	ll.c.m tub.ad.c.	(1981年)	千葉大学第二外科
8 ♂ 43	lm M	m mod.diff.sq.c.c.	lla+ll.c.m signet ring.c.c.	5ヵ月(生) (1981年)	兵庫県立日高病院 外科
9 ♂ 66	lm C	sm mod.diff.sq.c.c.	ll.c.sm tub.ad.c.	1年2ヵ月(死) (1982年)	平鹿総合病院外科

おわりに

本邦9例目の同時性食道胃早期重複癌の1例を若干の考察を加え報告した。

なお、本論文の要旨は第23回日本消化器外科学会総会(昭和59年2月宇部市)において発表した。

文 献

- 1) 食道疾患研究会編：食道癌取扱い規約。改訂，第5版，東京，金原出版，1976
- 2) 胃癌研究会編：胃癌取扱い規約。改訂，第10版，東京，金原出版，1979
- 3) Warren S, Gates O: Multiple primary malignant tumors, a survey of the literature and a statistical study. *Am J Cancer* 16: 1358-1414, 1932
- 4) 日本病理学会編：日本病理剖検輯報。14, 781, 東京，1973
- 5) 日本病理学会編：日本病理剖検輯報。24, 1422, 東京，1983
- 6) 林 郁彦：多発性原発癌の例証的追加並びに癌腫細胞化生の知見。癌 1: 390, 1907(8)よりの引用)
- 7) 阿保七三郎，三浦秀男，工藤 保ほか：日本における食道と他臓器の重複癌について。日消外会誌 13: 337-381, 1980
- 8) Goodner JT, Watoston WL: Cancer of the esophagus, Its association with other primary cancer. *Cancer* 9: 1248-1252, 1956
- 9) 中山恒明，柳沢文憲，磯野可一ほか：食道胃重複癌の7例について。癌の臨 9: 248-255, 1963
- 10) 五十峰達紀，井手博子，木下裕宏ほか：術前に診断しえた早期食道胃重複癌の1例。Prog Dig Endosc 8: 51-54, 1976
- 11) 芦沢一喜，森 昌造，渡辺登志男ほか：食道と化臓器との重複癌—とくに治療上の問題点について—。外科 40: 627-631, 1978
- 12) 大橋一郎，木下 巖，堀 雅晴ほか：食道胃同時早期重複癌の1例。日外会誌 76: 548, 1975
- 13) 前田迪郎，平井泰明，浜副隆一ほか：食道・胃同時性早期重複。外科 40: 632-635, 1978
- 14) 竹下正明，須田雍男，藤田吉四郎ほか：早期食道癌と早期胃癌を合併した1例。癌の臨 25: 1492-1497, 1979
- 15) Iizuka T, Watanabe H, Hirata K et al: A case of concomitant association of early esophageal carcinoma early gastric carcinoma and malignant lymphoma of the stomach. *Jpn J Clin Oncol* 10: 157-164, 1980
- 16) 磯野可一，佐藤裕俊，小池良夫ほか：食道再建術。手術 35: 1337-1343, 1981
- 17) 尾崎敏彦，松永雄一，林 採俊ほか：食道，胃究時性早期重複癌に対して2期的再建を施行した1例。手術 37: 463-468, 1983
- 18) 鍋谷欣市，本島悌司：早期食道癌の臨床。草間悟，和田達雄，三枝正裕編，食道癌，東京，金原出版，1982, p37-44
- 19) 国立がんセンター，食道疾患研究会編：全国食道がん登録調査報告。第2号，昭和52年症例。1980, p34-36